

「補遺」抗日民族運動記念碑探索

——霧社事件・烈女柳寛順・民族英雄安重根をめぐる——

本稿は、当初の構想では、この表題と内容で書くつもりではなかったと最初に告白しなければならない。柳寛順、安重根の顕彰碑については、茨城大学教育学部紀要（人文・社会科学、芸術）第42・43号に寄稿した論文を補遺する形で、本文末尾に付記として掲載するつもりであった。前稿執筆時に気付いてはいても、ほん訳作業未済であったり、「未発見」であった顕彰碑の追録を、予定していたのである。

論文執筆を考えた時点では、表題を「日韓交渉記念碑探索」と題して、これまでその存在がほとんど知られてこなかったり、詳しい記述を眼にする機会がなかった存在への具体的な言及を予定していた。

ところが、資料を整え、執筆に入ろうとしたその日の「朝日」に、衝撃的な記事が掲載され、論文執筆の構想を建て直す必要が生じたのである。

記事（一九九六・九・八付）は、「日本の中の朝鮮 史跡で紹介―高校教諭グループ 本を出版」の見出しをかかげ、在日韓国・朝鮮人生徒の教育を考える会／東京を編者とする『東京のなかの朝鮮』が、明石書店から刊行された事実を報じていた。そうして紹介された内容の中には、メインテーマを予定していた『青山霊園に墓のある朝鮮民族運動の指導者金玉均』靖国神社境内にかくされる様にして建っている

茨城大学教育学部紀要（人文・社会科学、芸術）四六号（一九九七）三九―五五

中川浩一\*  
崔智淑\*\*  
朴桂媛\*\*\*

『豊臣秀吉が朝鮮を侵略したとき、民衆が日本軍を撃退した碑』にかかわる具体的記述の存在が指摘されていた。いまひとつ、上野公園の西郷隆盛銅像とほど遠からぬ位置に建っている百済から渡来し、日本に文字を伝えたと称される王仁（わに）の碑への言及については紹介がなかったけれど、予定した題材が二つも先行提示されては、「日韓交渉記念碑探索」を書く意義は消失したと思わざるを得ない。

ところで、今夏、筆者の一人である中川は、十五年ぶりに台湾（中華民国）を訪れた。卒業論文指導がきっかけになって手がけた霧社事件―台湾統治時に「突発」した先住民族による最大規模の抗日蜂起―の研究に際して、秘蔵資料を心よく提供して下さった高永清（一九一六―一九八二）への墓参を行い、未亡人高彩雲さんとの再会を期したからである。そうして建墓の地である清流（日本統治当時は川中島）において、はからずも、霧社事件にかかわる記念碑が二つも存在する事実気付かされた。

日本軍警に「鎮庄」され、「反抗蕃」として父祖の地から川中島へ配流されたいきさつについては、中川浩一・坂本雅子の連名で「資料紹介・高永清『回想録』―川中島移住をめぐる―」を、茨城大学教育学部紀要（人文・社会科学、芸術）第36号に発表済であったから、前記

の碑については、補遺しなければならぬ。<sup>3)</sup>

一九九七年三月三十一日付で、定年の規まりに従って茨城大学教育学部を中川が去るに当たって、在職中に手がけた抗日民族運動にかかわる三部作の補遺をこの際に行うのは、無益の業ではないと信じている。

#### 同族移住の地に建つタダオノーカーン顕彰碑

台湾省南投県仁愛郷互助村清流（日本統治時は台中州能高郡川中島）の山裾に建つ高永清の墓（永息主懐 高家歴代祖塋 主後一九八二年冬立世子孫永記）に、中川と岩間（旧姓中村）<sup>3)</sup>を案内して下さったのは、高彩雲の前夫で霧社蜂起の英雄とされるダックスナウイ（日本名・花岡二郎）の遺児高光華であった。光復後、最初の民選郷長を勤めた義父高永清の跡をついで仁愛郷長を経て、その後は母を助けて盧山温泉（指導者モーナルダオの故郷マヘボ）で碧華荘旅社の経営に専念されてきた。

一九七九年に、中川と中村が高永清の案内で清流を訪ねたときには、そこは山地管制区域内であり、入山に当たっては許可証の提示を求められたが、現在は規制緩和で検問所は廃止になっている。交通の便も格段によくなり、南投客運の路線バスが、清流入口を通って北港溪をより深く入った恵孫林場まで通じるほどである。

北港溪に架っていた吊橋は、コンクリート橋に架け替えられたが、これは高光華の郷長在任時の施策であるという。下位段丘、上位段丘に分散して建てられていた木造バラックも、多くは見ばえよく改築あるいは増築され、NIESSの一員として高度成長を続ける台湾経済の一

端をうかがわせる。

高永清の墓は、上位段丘面に位置し、集落から少し離れた場所に建てられていた。土地の相をあれこれ勘案のうえ、場所を選んだと、高光華は説明した。キリスト教に帰依した故人にふさわしく、墓は十字架とろうそくを形どって作られている。

参拝を終った後に、高光華が背後に建つもう一つの「墓」に案内してくれた。お母さんの父、私の祖父です。骨はありませんが、戦死した場所は判っているのです、その土を持ってきて親族が抛金のうえ建てたのです」との説明を受けた。それゆえ、厳密に言えば墓ではなく、英雄顕彰の記念碑というべきだろう。「浩然正気」の石額をかかげた下に「故塔托欧 諾幹之墓 荷才社首長 民国十九年霧社事件死亡」と記す墓標が取り付けられている。また両脇に「勇者不懼」「英烈千秋」の石額もある。

蜂起から数日続いた集団戦闘のおり、ホーゴー社（集落）の壮丁を率いて勇戦した頭目タダオノーカーン（塔托欧諾幹）が葬られる人なのだが、彼は「蕃地警察」の勧誘を受けたにしても、息女オビンタダオ（現・高彩雲）を霧社尋常小学校、ついで埔里高等小学校に進学させたほか、「蕃地警察」の末端に位置せず警守ダックスナウイ（花岡二郎）と結婚させたことから判る様に、親日的人物であった。

しかし、不正蓄財を背景にもつ強制労働で苦しむタイヤル族セイダツカの人びとが蜂起に踏み切ると、民族の誇りに殉じ、タダオノーカーンは率先して戦いの先陣を切り、壮烈な最後を告げたのである。

モーナルダオはいち早く戦線離脱のうえ自殺したのに、立派な墓がありますね。だから一族が抛金してこの墓を作ったのです」と、高光華は説明した。だが、モーナルダオの一族には、別の怨念があるのだという。

### 蜂起を懐古し顕彰する「餘生之碑」

タダオノーカンの墓を後に、高光華が私たちを案内したのは、川中島神社の跡地であった。神殿、鳥居はもち論ないのだが、側面に「奉納 昭和十六年十月二十五日」と文字を刻んだ石灯籠が一对残り、その奥に「餘生紀念碑」と刻字した石板を取り付けた墓石状の碑が建っていた。この碑は、柳本通彦『台湾・霧社に生きる』（一九九六年）が写真のみを紹介しているけれど、建立のいきさつには全く触れていないので、本稿に収載する意義があると考えてみた。神社の跡地に建つので、本稿に収載する意義があると考えてみた。神社の跡地に建つので、本稿に収載する意義があると考えてみた。詳細は中国語でかかれた副碑「餘生紀念碑記」の文面を介して明らかにする。

清光緒二十一年（公元一八九五年）、甲午戦争失敗、清廷與日本簽訂馬関條約、将台澎等地割讓日本、民國十七年、日人在霧社爲修建武德殿及霧社公學校、徵集山胞勞役、命攀登高山峻嶺砍伐木材運回霧社、山胞以鐵索從山頂滑曳到地面之方法運材、招致日警不悅、斤篤毒打運材山胞、傷跡累累、慘不忍睹、於是反抗與復仇的火種、油然而生。

民國十九年十月七日、馬赫坡社一山胞舉行婚禮、邀日警巡佐吉村參加宴會、山胞爲示觀迎與其握手沾汚吉村之白手套、吉村即舉杖痛打斥責該山胞、馬赫坡社頭目莫那魯道之子遂向吉村敬酒以示歉意、亦遭毆打成傷、聲言將嚴加懲處、莫那魯道唯恐事態嚴重、對山胞不利、携酒向吉村道歉未被接受、益增山胞對日人之仇恨與痛恨、紛紛促請莫那魯道密謀起義、誓滅日人。

民國十九年十月二十七日晨、霧社公學校舉行運動會、日人能高郡守及台中洲警務部理番課顧問等多人均前來觀禮、當日旗上升之際、莫那魯道一聲令下、事先埋伏在操場内外之山胞、以排山倒海之雄威、

殺進大操場、場内一百三十四名日人、全部被殲、無一倖免、義攀爆發後、震恐全台、日方及調集軍警進攻霧社、經三晝夜之激戰、日方傷七慘重、遂再增援以並以飛機投擲毒彈、山胞退守馬赫坡、孤立無援、戰爭相持二十四天、暮那魯道見大勢已去、遂率抗日山胞九百人投崖自盡、壯烈成仁。

霧社起義事件後、抗日山胞義士遺族、劫後餘生者僅二百餘人、日人爲逸遭後患、於次年（民國二十年）五月六日、將該批遣送至川中島（即今仁愛鄉互助村清流部落現址）一則易於監視、二則置山胞遺族自生自滅之地。

台灣光復後、仁愛鄉首任鄉長高永清先生商高善心人士陳明震先生、於民國三十九年五月六日折除日人神社、建立餘生紀念碑、以慰抗日山胞義士之在天靈、今鑿碑社原地雜草叢生、幾成廢墟、特予重生、並將霧社事件始末

記述如上、永誌不忘。

南投縣縣長吳敦義 謹記

中華民國七十五年八月七日

通読すると、本碑は一九五〇年、初の民選郷長になった高永清が、「日警」の監視に忍えながら生を全うし得たのを喜ぶと同時に、民族の誇に殉じた人たちの顕彰を計って建立した事実がうかがえる。霧社に建つ後述の記念碑建立に先だつこと三年であった。副碑は、その後の荒廃を憂えての再整備（一九八五年施工）の結果とみてとれる。その文面は、霧社事件発生の要因と展開過程を簡潔に記したと評すべきだろう。〔付記〕本稿脱稿後、霧社事件最後の生証人である高彩雲女史が急逝され、盛大な葬儀が営まれたとの知らせが高光華さんからもたらされた。筆者の訪台から二週間後の他界とは、いまでも信じられぬ思いである。



川中島(現・清流)に建つ「餘生紀念碑」  
1996年8月写



川中島(現・清流)に建つ  
タダオノーカンの墓  
1996年8月写



霧社に建つ「莫那魯道烈士之墓」  
1981年1月写



「霧社山胞抗日起義紀念碑」全景  
1996年8月写



中央の人物がモーナルダオ  
(中川 複写)



モーナルダオ、花岡一郎が祀られる台北の忠烈祠  
1996年8月写



## 霧社に里帰りの遺骨を葬るモーナルダオの墓

霧社事件参加者を顕彰する記念碑の中で、多くの書物に紹介されるのは、天険としての入止関を通り抜け、ヘアピンカーブで山腹をよじ登って到達した尾根筋に建つ「霧社山胞抗日起義記念碑」である。

偶然の機会に発掘された被虐殺「帰順者」の遺骨埋葬を兼ねて、一九五三年に建立されたもので、主導したのはこれも高永清であったとされている。

この碑は、裏面に霧社事件発生の要因、戦闘の経過ならびに建碑の由来を記した文が、銘板として取り付けられている。中華民國政府庁長の撰文と記されるが、その全文は、すでに紹介したので、再掲は行わない。

記念碑の背後には、事件数年後、これも偶然に「発見」されたモーナルダオの白骨遺体が、台北帝国大学土俗人種学科の資料陳列室で標本になった後、台湾大学の保管にまかされたものを里帰りさせた結果としての「莫那魯道烈士之墓」がある。墓石を中心に、鳥が羽根を広げた形で両脇に取りついた壁画は、壮丁に決起を促す演説をするモーナルダオ（右）、戦闘を指揮するモーナルダオ（左）を表現する。

墓銘の文を、次に示してみよう。

烈士於民國前三十九年出生、爲霧社馬赫坡社世襲頭目、在民國十九年霧社抗日事件中、領導抗暴壯烈成仁、其賢貞不屈之志節、是爲青年掛模、謹誌墓前以昭忠魂、以勵來茲。

中華民國六十三年三月五日

しかし、この墓にモーナルダオの骨が埋葬されたのは、墓銘が記された日付ではなく、中華民國六十二（一九七三）年十月二十七日であった事実が、『聯合報』縮刷版の十月二十八日付を閲覧した柳本通彦に

よって確認されている。

遺骨帰還時の仁愛郷長は高光華、墓銘や壁画の取付も、彼の在任中の出来事であった。だが、霧社公学校校庭での日本人殺戮を指揮した後、一族を率いてマヘボ社に帰り、親族の婦女子に縊死を命じた後、勿然として深山に消えたと伝えられるモーナルダオが、集団戦闘の勇士の様にみだてられ、顕彰されることには、郷長としての高光華には、釈然とはしない処があったのだろう。しかし、霧社蜂起の英雄としての評価が定説化しているモーナルダオ像を、公然と改めることは不可能ゆえ、せめてものレジストとして建立したのが、清流に建てたタダオノーカンの墓であった様に思われる。

この様に、霧社においては、モーナルダオは抗日烈士として、最高の評価を受けるのだが、中華民國で事実上の首都として機能する台北に場を移すと、霧社事件にかかわる烈士で最高の扱いを受けるのは、ホーゴ社出身で台中州乙種巡查に任用されながら、差別と同族酷使への抗議をこめた蜂起を、指揮したとみだてられるダツキスノービン（花岡一郎）であるという。

台北市の北郊、台湾随一の豪華ホテル圓山大飯店から東へ一キロあまり、基隆河沿いに建つ忠烈祠は、台湾の靖国神社的存在で、辛亥革命や抗日戦争などでの勇者を祭っている。その祭壇の中央に位置するのは、花岡一郎であり、モーナルダオはやや端に位牌が位置づく由である。

「日警」の犬として窮死したとの説もある花岡一郎に、なぜ見返されねばならぬのかと、モーナルダオの遺族（息女とその養子夫婦）は、無念に思っている様だと、柳本通彦は書いている。

奨忠公園付近の柳寛順銅像の銘板を読む

差別と圧政に苦しんだ台湾先住民（高砂族）が、「日帝」に対する最大のレジストを構えたのが霧社事件であったのに対し、同じ状況下で韓民族が立ちあがったのは、一九一九（大正八）年三月一日を期して展開された三・一独立運動（韓国での呼称は三・一運動）とされている。その過程で最大の英雄とされてきたのは、万歳デモを組織し、死に至るまで節を屈しなかった少女柳寛順（一九〇四—一九二〇）であった。

柳寛順の顕彰碑が韓国全土にどれほどあるのかを、私たちは知り得ないが、首都ソウルと生誕地の忠清南道並川面にそれぞれ建つものについては、「茨城大学教育学部紀要」（人文・社会科学、芸術）第43号に寄稿したが、刊行後、不備に気付いたのに加え、新たな「発見」もあったので、次に前稿を補遺してみよう。

数ある柳寛順顕彰碑の中で、最初に建ったと思われるのは、当初、南大門広場に建てられ、後に奨忠公園の近くに移設されたと思われる銅像である。銅像建立を報じた「朝日」の記事と銅像の基壇背後に取り付けられた銘板の日付照合から、現存する銅像は、建立当初の位置にないと判断したのだが、原文はハンゲルで表記される銘文は、次の通りである。

柳寛順は一九〇四年三月十五日、忠清南道天安郡東面地靈里で父親柳重権氏と母親李氏の間四人兄妹中の独り娘として生まれた。

一九一六年三月に普通学校を経て梨花学堂高等科一学年に入学した。

一九一九年三月一日、祖国愛に燃える二十万同胞が日帝の銃や刀が霜の様に光り輝く中で自由がなければ死を与えよと叫んで抗議の万歳を叫んだとき、柳寛順も太極旗を高くかかげ、大韓独立万歳を大

声で叫んだ。当時、年は僅か十六歳の少女であった。無名の指導者として、彼女は天安郡並川面の市場で万歳運動を起こしたのである。それは天にも響き地をゆるがすものであった。彼女はついで日帝に捕えられ、七年の懲役を宣告され、両親は無惨に銃殺されている。日警はあらゆる拷問で彼女を降伏させようとしたが、彼女は凜然として志をひるがえさなかった。凶悪な日警は、結局柳寛順を監獄で殺してしまつたが、その日は一九二〇年十月十二日であった。ああ、韓国の娘よ。柳寛順はこの処で永遠に生きている。同胞の胸のすみずみに太陽の様に生きている。亡国の恨を胸に抱いて育った貴女は天上の星になって永遠に祖国を守護して下さい。

これとは別に、建立者にかかわる小さな銘板も取り付けられ、次の記事が示される。

彫刻 金（KIM）SEA JUNG

文 徐（SEO）MYONG HAK

書 李（LEE）KI WOO

題字 催（CHI）JUNG MUN

西曆一九七〇年十月十二日

愛国先烈銅像建立委員会 ソウル新聞社 催（CHI）JUN

MUN奉納

デモを組織し、並川市場で万歳を叫ぶ柳寛順の姿は、三・一独立運動の発端となる「独立宣言書」朗読の地、ゴダ公園（タブコル公園）内のレリーフ群の一つにもなっている。その下に示された銘板の記事は、次の通りである。

一九一九年陰曆三月一日、天安郡並川市場で数千名の群衆が独立宣言とともに万歳を叫んだ。首謀者ユ・チョンチュンなど二十数名は現場で惨殺され、柳寛順は日警に逮捕され、監獄に送られ、ひど

い拷問にも屈せず抗争したがついに獄死した。<sup>15)</sup>

### 母校構内に顕彰の柳寛順石像が建つ

君島和彦・坂井俊樹・鄭在貞『旅行ガイドにないアジアを歩く 韓国』（一九九五年）によると、ソウル市街での柳寛順にかかわる史跡は、前記の銅像とレリーフ以外に、柳寛順記念館、その前庭の柳寛順像、柳寛順の井戸（梨花女子高校内）、西大門独立公園内の復元地下独房などがあるという。これらのうち、彼女が学んだ李花学堂高等科の後身といえる梨花女子高等学校と西大門公園は、それほど離れてはいないので、一九九六年三月に中川と崔の両名が、現地を訪ねて探索を行ってみた。

梨花女子高等学校の位置は、日本人向けに韓国観光公社が編集した『トラベルマップSEOUL』に漢字表記で位置が明示されるので、容易にゆきつける。別の市街図でその構内に柳寛順記念館が併設される事実を読みとれる。

梨花女子高等学校は、正門脇に守衛所を設け、気安く入ってはいけないし、韓国語が話せない日本人だけでは見学しづらい雰囲気だが、所在をたずねた崔の質問には、親切に答え、見学を許可してくれた。

正門から右手前方に、柳寛順記念館は建っている。実態は柳寛順の名を冠した講堂で、記念展示があるわけではない。広い間口の玄関を入った処に広がるホールの正面壁上に、柳寛順の全身を現す肖像画が掲げられている。並川面の崇幕閣に奉安されているものとは、別種のものである。

石像は記念館の前庭に建っているが、獎忠公園近くに建つものが巨

大なそれとは、全く対照的に、人の背丈にもたらない、しかも円筒形の台石に乗った小さな石像であった。銘文は光背状の石板背後に、次の様に記されており、全文ハンゲルで表記する。<sup>16)</sup>

殉国処女 柳寛順

一九〇四年三月十五日〜一九二〇年十月十二日

忠清南道天安郡東面龍頭里に生まれる。

短い一生を国に捧げた一輪の木槿（無窮花ムムグンファ）

いかめしき大霜のため、咲くこともできなかったつぼみは、いま自由にむせびなく三千万の心の中に咲くだろう。

今日を楽しむ兄弟よ！ 今日の栄光を讃える姉妹よ！ 在天の英

霊とともに、永遠に、永劫に、きわだつ寛順さんの忠魂のために、一緒にうつつむいて合唱しよう。

そして、その聖なる芳香が、この街のすみずみまで漂うようにしていこう。

投獄 一九一九年四月一日（旧曆三月一日）

梨花学堂高等科一年三学期（十六歳）

獄中殉国 一九二〇年十月十二日（十七歳）

一九六二年 大韓民国建国功勞勲章授与

梨花女子高校を後に、義州路を北西に十五分ほど歩くと、西大門独立公園にたどりつく。社稷路との交差点に接して、清朝への服属を否定し、事大外交廃止のシンボルとなった「独立門」が建つのが、名称の由来だろう。王城之門であった西大門があったこともかわりを持つが、日帝支配当時の西大門という地名は、政治犯を収容する西大門監獄の所在によっても知られていた。

光復後も刑務所は存続したが、現在は赤煉瓦造りの建物や施設などが、歴史記念物として保存され、展示が行われている。柳寛順は、こ

ここに収容されたが、地下式の独房が復元の対象となっており、また収容状況を示す展示は、天安郊外の「独立記念館」に存在する事実も、付記しておく。

### 出生地付近に建つ二つの柳寛順顕彰碑

柳寛順が万歳デモを組織した並川市場に近い記念祠堂の構内には、いくつもの顕彰碑が建つ事実はすでに発表した。が、祠堂入口右脇に建つ「殉国少女柳寛順烈士招魂墓奉安記念碑」の裏面に収まり、建立の由来を記す漢字まじりのハンゲル碑文への言及をしそなだったので、紹介の筆をとってみた。<sup>17</sup> 柳寛順烈士記念事業会が、建碑の当事者である。

殉国少女柳寛順烈士招魂墓と尊影像を奉安して

三・一独立宣言に基づく国の独立と民族の自主自尊を旗印にかけ、四月一日アウオ独立万歳運動の主役を果した柳寛順愛国少女は、日帝の残忍無道な拷問と蛮行によって命を落とす瞬間に、私を殺すことはできても、わが国の独立を阻むことはできない。お前たちは必ず滅びるに違いない」という一言を残した。一九二〇年十月十二日その日をわれわれ韓国人は千秋の恨みとして、いつまでも哀惜するだろう。十七歳の柳寛順は、うら若い乙女のまま、残酷な殺されかたをし、墓も取りこわされて跡形もなく消失した。古今東西このようなことは、二度とあってはならない。こうした現実の前に、烈士の怨恨と民族の怒りをどのようにすれば晴らせるだろうか。

侵略者日帝の絶対に許せない蛮行と人類の歴史に二度とあってはならない暴悪を、われわれはきびしく糾弾する。殉国少女柳寛順烈士の孤魂は人びとにかえりみられぬまま、安らかに眠れる墓もなく

七十年あまりの星霜を経たのである。ここにわれわれは、自責の念を持つと同時に、民族の怒りを禁じえない。烈士の深い怨恨を晴らし、魂を慰めるために、招魂墓と尊影像を奉安し、烽火台への登頂路を竣功させた。殉国少女柳寛順烈士の崇高な憂国愛情を永遠に祭り、心に留め、歴史の場であるここに、民族の名を借りて、厳肅な心もちつつこの碑を建てることにする。

一九九〇年四月一日

（崔智淑 訳）

この碑文を読んでみると、「追募閣」と名付けられた祠堂はかなり早い時点で建立されていたけれども、付近一帯が公園化されてからはそれほど年数が経過していない事実が明らかになる。

ところで、記念祠堂と安市街のほぼ中間の位置に一大総合歴史博物館といべき「独立記念館」があるけれど、広大なその庭園に建つ愛国烈士の語録碑のひとつとして、柳寛順のそれも建っている。

少女柳寛順烈士の祈願

ああ神様、もう時間が迫ってきました。仇である倭を退けて下さり、自由と独立を私たちにお与え下さい。明日、旗あげする代表たちに、さらなる勇氣と力をお恵み下さい。そのうえ、それをきっかけにして民族が幸せになれるようお助け下さい。

神様、私と一緒におられ、私に勇氣を授けて下さい。

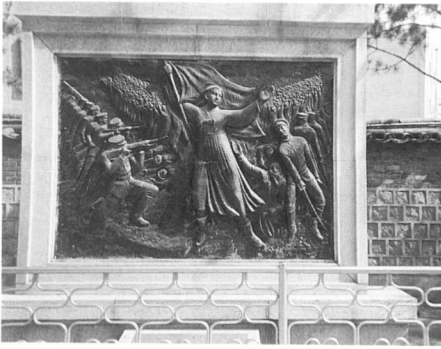
大韓独立万歳！ 大韓独立万歳！

一九一九年三月三十一日、旧暦二月二十九日（崔智淑 訳）

同様の碑文は、前記の招魂墓前の語録碑にも記されているのを、中川は、一九九五年三月に確認した。<sup>18</sup>

裏面には、「柳寛順烈士略史」が刻字されている。

一九〇三年三月五日 高興柳氏、忠南天安郡並川面龍頭里に出生  
一九一一年三月 並川キリスト教の週日学校に入学



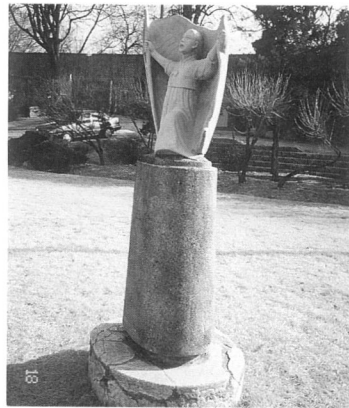
パゴダ公園東縁を形どるレリーフ群の1枚  
並川市場で万歳デモを組織する柳寛順  
1996年3月写



獎忠公園近くに住つ柳寛順銅像基盤の  
背面に取りつけられた銘板  
1996年3月写



梨花女子高校の柳寛順記念館  
1996年3月写



梨花女子高校構内に建つ柳寛順像  
1996年3月写



独立記念館構内に建つ  
柳寛順語録碑  
1996年3月写



招魂墓建立の由来を記す石碑  
柳寛順記念祠堂構内  
1996年3月写

一九一六年三月 公州キリスト教の宣教師の推薦で梨花学堂へ入学  
一九一九年三月 高宗皇帝の国葬をきっかけに梨花学堂抗日独立秘  
密結社に参加。三月一日、パゴダ公園で行われた独立宣言文発表  
に参加する。

一九一九年四月一日 梨花学堂が鎖されたため故郷である並川面  
に帰って同志を集め、アウオ万歳運動を主導する。

一九一九年 万歳運動の主役として逮捕され、公州裁判所で懲役七  
年の刑に処せられる。ソウルの再審裁判所で上告審に対する法廷  
冒瀆罪を加えられ、原審どおり七年の刑と決まるが、西大門刑務  
所では獄中万歳の結社闘争を行う。

一九二〇年十月十二日 獄中での闘争中、うら若い十七歳で日本軍  
閥により残虐に殺される。

一九六二年八月十五日 大韓民国建国功労勲章を追叙される。

一九八八年八月十五日 光復節（崔智淑 訳）

建立 柳寛順烈士記念事業会（以下 会長 委員長など氏名）

### 獄中から同胞に呼びかけた安重根

抗日民族運動の英雄として、柳寛順と並び称されるのは、亡国への  
「元凶」と目される前韓国統監伊藤博文を当時は大清帝国の領域であっ  
ても、ロシア帝国による治外法権が行使されていた東清鉄道ハルビン  
駅構内で射殺した安重根であろう。

韓国内ではもとより、日本国内にも安重根顕彰碑が存在する事実  
については、既述したが、そのおりに具体的な言及をなし得なかった碑  
文のいくつかについて、本稿では補足しよう。

安重根顕彰の韓国側での「聖地」は、ソウル直轄市中区の南山中腹  
に位置する安重根記念館だが、そのかたわらには、安重根銅像に加え  
て多くの顕彰碑が建っている。それらのほとんどについては、碑文を  
掲載した解説の冊子が刊行済であるから、屋上に屋を架す言及は無意  
義であるけれども、銅像の背後に壁状に並ぶ銘板の文章はなぜか割愛  
されているので、銅像基盤に取り付け銘板を含めて、紹介の筆を加え  
てみよう。

背広姿の安重根が、太極旗を右手に持って大幅に歩む姿の銅像を乗  
せた台石には、横書に「安重根の思想」と記す銘板の下に、ハングル  
縦書きの銘板が、次の文章を収めている。

祖国が傾いて行くとき、精気をたてた人々よ！

歴史の波の上に 山のようにたてる人よ！

月日も足を止めて 再びこれを見下すだろう。

李思想が文を書き

孫 ぜ ホヨンが刻す（朴桂媛 訳）

壁面に九枚並ぶ銘板のうち、中央に位置する長文のそれは、安重根  
の略歴であり、その両側にそれぞれ獄中にあるとき揮毫した「遺墨」が  
取りつけられ、右端、左端の三枚がそれぞれ「語録」を構成する。

右側の「遺墨」は、「東洋大勢思杳杳 有志男児豈安眠 和局未成猶  
慷慨 政略不改真可憐」と読む由だが、現物は字画をあげず、一続き  
に書いた後に、庚戌三月於旅順獄中 大韓国人安應七 謹拝と刻字さ  
れている。しかし現物には、右肩に贈仙境先生の文字のあることが『大  
韓国人安重根義士』（一九九四年）収載の図板から読みとれる。

左側の「遺墨」は、「丈夫雖死心如鐵 義士臨危氣似雲」と読むのだ  
が、現物は一続きに読かれ、署名も前者と同じ、また現物には、これ  
も右肩に贈猛警視の文字がある。

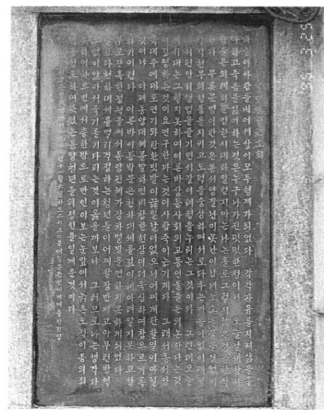




南山公園（朝鮮神宮跡地）に建つ安重根銅像と銘板群  
1994年8月写



安重根記念館前庭に建つ  
「伊藤博文罪悪十五個條」の碑  
1995年3月写



銘板群最右端に位置する  
「韓国人安重根所懐」  
1995年3月写



水戸市内千波湖畔に建つ「朝日親善」の碑  
1996年9月写



独立記念館構内に建つ安重根語録碑の  
裏面に記される安重根略歴  
1995年3月写

いずれも伊藤博文射殺という非常手段をとったことへの心意気を示したものであろう。

なぜ、非常手段に訴えたかについては、最右端に取り付けられ、「韓国人安重根所懐」と題される文章がそれを説明する。全文ハンゲル表記を用い、次の内容を構成する。

空から人は生まれ、世の中すべてが兄弟になった。人はそれぞれ自由を守り、生を尊び死をきらうのは、だれもがいただく当然の感情なのである。世の中の人は、今の時代を文明の時代だというけれども、私は一人でそうではないと嘆息する。いわゆる文明というものは、東洋西洋それぞれに立派な人、そうではない人の区別なく、また男女老幼を不問とし、それぞれの天賦の品性を守り、道徳を培いながらお互いに争う心なく、自分の土地で楽しく生業を楽しみ、共に太平を享有する中に存するものである。

ところが今の時代はそれとは異なり、いわゆる上等社会の高等人物たちは競争ばかりを議論し、人を殺す機械ばかりを研究している。だから東西両洋の六大陸に大砲の硝煙と弾丸の絶える日がないことを、私は慨嘆するのである。

現今の東洋の大勢は、悲惨な現象がさらに深く進行し、筆に記しがいほどである。とりわけ伊藤博文は天下の大勢を深く考えることなく、無理を重ね残酷な政策を推進して、東洋全体が滅亡をまぬかれない体制を作りつつある。

悲しい！ 天下の大勢を憂いている青年たちよ！

腕ぐみをするだけで、いかなる方策も考えず、座して死を待っていることで良いのであろうか。それゆえ、私は考え抜いた末、ハルビンで銃弾一発、万人の見ている前で盗賊としての伊藤の罪悪をあばくことにより、志を持つ東洋の青年たちの精神を、覚醒させよう

としたのである。

これは安義士が、一九〇九年十一月六日午後二時三十分、日本官憲に提出したものである。  
（朴桂媛 訳）

#### 裁判で陳述した伊藤博文の「犯罪行為」

この弾劾書を提出するに先だって、安重根は法廷で伊藤博文が犯した「罪悪」を十五箇条にわけて説明した。その内容は最左端に、これもハンゲル表記で示される。これとは別に漢字表記で天然石に刻字した記念碑が、記念館前庭に数多く建つ石碑の一つとして存在する。

ハンゲル表記の銘板に刻字された文章を、漢字表記のそれと見比べると、簡略化がなされているので、石碑の文章を勘案しながら、次に訳出しておこう。

#### 伊藤博文罪悪十五箇条

- 一、一八九五年 大韓帝国内において人をかたらい、日本兵を皇居に侵入させて大韓帝国皇后陛下を殺害させた。
- 二、一九〇五年 武力を行使して大韓皇帝陛下を脅迫し、不利な五箇条の条約（第二次日韓協約）を結ばせた。
- 三、一九〇七年 さらに兵力を増して皇室を圧迫し、大韓皇帝陛下を退位させた。
- 四、大韓帝国内の山林、鉸山、鉄道、漁業、農商工業など、十一にも及び利権を強奪した。
- 五、いわゆる第一銀行券を強制発行し、全国の財政を枯渇させた。
- 六、国債一千三百万元を強制的に負担させた。
- 七、学校の書物を勝手に燃やし、内外の新聞記事を操作し人民に対

する報道を妨げた。

八、国権回復のために蜂起した義士たちと彼等の家族を弾圧し、十数万人も殺させた。

九、韓国青年の外国遊学を禁止した。

十、五賊、七賊、一進会と共謀し、韓国人が日本の保護を希望するようにみせかけた。

十一、一九〇九年、さらに不利な五か条の条約を強制して結ばせた。

十二、韓国が日本の属国になることを希望している様に宣伝した。

十三、二千万の精霊が声を振わせて号泣しているのに、韓国は太平無事であるとして、明治天皇を欺いている。

十四、東洋平和をおびやかして数億人が将来滅亡しかねない事態を作りだしている。

十五、一八六七年六月、明治天皇の父親（孝明天皇）を弑殺させた。

このほか伊藤博文の罪条は、枚挙しえないほど多数にのぼる  
一九〇九年十一月四日午後二時三十分

旅順監獄中にて大韓国人安重根（朴桂媛 訳）

理路整然とした射殺の意味づけは、やがて日夜にわたって安重根を見守り続けた看守としての憲兵上等兵千葉十七を感動させ、安重根との間に深い友情が培われる原因にもなったわけである。<sup>20</sup>

壁面に並ぶ九枚の銘板のうち、右端から三枚目が、伊藤博文射殺は犯罪ではなく、戦闘行為としてのものであり、従って安重根は無罪であると主張した事実を説明している。これも、全文ハンブル表記で示される。

義拳の理由

私が博文を射殺したのは、韓国独立戦争の一部分であり、また私

が日本の法廷に立っているのは、戦争に敗れて捕虜になったからである。

私は個人の資格で事を行ったのではなく、韓国義軍参謀中將の資格で、祖国の独立と東洋平和のために実行したのであるから、万国公法によって処理してほしい。

これは安義士の日本の法廷での発言である。（朴桂媛 訳）

## 二種類残された遺言

一九一〇（明治四十三）年三月二十六日、韓国併合に先だって、殺人犯人として死刑を宣告された安重根に対する刑が執行される。その直前、安重根は看守千葉十七に対し、友情と好遇へのせめてもの謝礼として、最後の遺墨「爲國献身軍人本分」を贈ることになる。日韓双方で記念碑に刻字されるこの遺墨の現物は、安重根義士記念館に展示されている。<sup>21</sup>

安重根は、肉親と同胞へ、それぞれ遺言した。それぞれハンブル表記とした銘板は、壁面中央に位置する「安重根略伝」の左側に、同胞あて、肉親あての順に取り付けられている。

同胞に告げる

私は韓国独立を回復させ東洋平和を維持する目的で、三年間を海外で過ごし、風餐露宿の生活をしたが、結局その目的を果たし得ずしてここに死ぬのである。

われわれ二千万の兄弟姉妹は、それぞれ奮起して学問に努め、産業の振興を図りながら、私の志を受けつぎ、自由独立を回復してくれるなら、死んだ者も、後に恨みを残さないだろう。

これは安義士が殉国の直前に遺言した文である。（朴桂媛 訳）

同文の碑は、忠清南道天安市郊外に位置する「独立記念館」構内で宮殿風の「民族の家」を背にした左手前に、これもハンゲル表記で建つのだが、その裏面には「安重根義士略歴」が箇条書として次の様に示されている。建立は一九八六年七月、順興安氏宗親会が抛金している。

一八七九年 九月二日黄海道海州で出生した。

一九〇五年 日本によって乙巳条約が強制的に結ばれてからは、不法侵略を世界に訴え、また国際情勢を知るために、中国の上海を視察した。

一九〇六年 鎮南浦に移住し、三興、敦義の二つの学校を建て、救国英才の養成を志す。

一九〇七年 七条約（第三次日韓協約）が強制的に結ばれてからは、三カ月にわたって北間島地方を視察し、ウラジボストクにおもむき義兵を集めて訓練する。

一九〇八年 大韓帝国義軍参謀中将兼特派独立隊長として、義軍三〇〇余名を指揮する。豆満江を渡って祖国へ進撃し、度興、会領で日本軍と激戦する。

一九〇九年 ロシアのカリ（烟秋）で、十二人の同志が指を切って血書して救国を誓い（断指同盟）、十月二十六日ハルビンで韓国の主権を奪いとった日帝侵略の元凶伊藤博文を射殺する。獄中で自叙伝と東洋平和論を執筆する。

一九一〇年 三月二十六日午前十時十五分、旅順刑務所の刑場で殉国した。三十二歳。（崔智淑 訳）

肉親あての遺言は、次の通りである。

最後の遺言

私が死んだら私の骨を、ハルビン公園の脇に埋めておき、国権が回復されたときには、故国に返葬してほしい。

私は天国に行っても、続けてわが国の回復のために力を尽すだろう。貴方たちは国へ帰り同胞たちがそれぞれに国家に対して責任を負い、国民としての義務を果たしながら、力を合わせ、功労をたて、業を成すように話してほしい。

大韓独立の声が天国に聞こえてくれば、私は踊りながら万歳を叫ぶだろう。

これは、安義士が殉国の直前に、定根、恭根の二人の弟と洪神父に与えた文章である。（朴桂媛 訳）

#### 銘板に記される安重根の生涯

安重根の義士の行動については、前記の略歴でその概要が明らかにするが、その生いたちや人となりについては判らない。だがそのことについては、銅像の背後に取り付けられた長文の銘板が具体的に説明してくれるので、本稿の結びにかえて、訳出しておこう。

祖国を救おうとして命を捧げた多数の先烈の中でも、民族精氣の代表的発現者は、安重根義士である。

一八七九年九月二日に、彼は黄海道海州に生まれた。祖父は鎮海県監を勤めた仁寿公で徳望高かった人であり、父親は成均進士である奉勳公、母親は趙氏であった。義士は生まれた時から腹部に七つのほくろがあるので、北斗七星になぞらえて、應七と名付けられている。

その後、家族は信州郡に移り住み、山水風景が美しい清溪洞で生

活する様になったのは、義士二歳のときである。四歳で字を習い、文士としての将来性をみせた。七歳のときから馬に乗ったり、矢を射たりして、武士としての気性もうかがわせた。十六歳のとき、東学革命に名をかりて地方暴徒が蜂起すると、父親が募集した壮丁たちをつれて、彼らを鎮圧した。

金洪涉公の息女垂麗と結婚した後、カトリックに入信し、洗礼を受け、多黙というクリスチャンネームを受けると同時に、洪神父からフランス語と新しい知識を学んだ。

十年が経って二十七歳のとき、乙巳条約が結ばれた事実を知り、日本の不法侵略を世界に知らせるために、上海に渡ったけれども、父が病に伏したため、郷里に帰らねばならなかった。父親の死後、義士は家を鎮南浦に移し、財産を投じて敦義学校を設立し、救国の人材養成に力を入れると同時に、愛国志士の講演会を開いて、民心の啓蒙に全力を尽した。

二十九歳のとき、胸の血がわきたつまま、国をでて間島におもむき、大韓義軍参謀中将及び特派独立隊長などを名乗って、武力による熾烈な抗日闘争を展開し始めた。

三十歳のときには、独立軍の三百余名を率いて豆満江を渡り、慶興の日本警察と交戦して五十余名を倒し、五十余名の日本軍守備隊とも交戦した。

三十一歳のときには、決死同志十一名と一緒に揃って指を切り、太極旗に大韓独立の四字を血書した。

伊藤博文がロシアの大蔵大臣ココフツェーフと会って東洋政策を協議しようと北部満州の視察計画を発表したとき、義士はいまこそ国と民族に対する仇を返す機会と考え、元凶射殺を企てて禹徳純同志とハルビンに向った。

歴史的な一瞬となった一九〇九年十月二十六日午前九時半、ハルビン駅頭で天地を揺す正義の銃声がおこり、各国代表の歓迎と軍隊の護衛の中で下車した伊藤博文は、単身で走り寄った義士の雷の様な射撃の三発に即死し、続いて第四、五、六発により、元凶の随行者たちの川上俊彦、森泰二郎と田中清二郎が倒された。義士は拳銃をすて「コリア、ウラー」をいく度も叫んだ後、「神よ！ 暴悪な者を撃ち殺させて下さり、ありがとうございます」となえながら笑みを浮かべて、ロシア憲兵に、泰然として捕えられた。

この痛快な便りは、電波に乗って世界各地に知れわたり、韓国人と中国人でそれを喜ばぬ人はないほどであったが、義士は日本側官憲に引き渡され、旅順の監獄で五カ月にわたる苦痛に耐えながら、あくまでも屈服せず、万国の自由平等を叫び、東洋平和論を執筆する一方、翌年二月七日から十四日に至る六回の公判において、韓国の国土、国権を侵略して東洋の平和をふみにじったことなど、伊藤博文の十五箇条罪悪を、きびしく糾弾して、義拳の理由を明白にした凛然たる態度をみせたのである。

しかしついに二月十四日、義士は死刑を宣告され、同志禹徳純、曹道先、劉東夏にも、それぞれ微役が言い渡された。

義士は二千万同胞の骨にしみいる遺言を残し、韓国服に着替えたうえで旅順監獄の刑場で静かに殉国した。それは一九一〇年三月二十六日午前十時、享年三十二歳であった。たとえ六身の一生は短かったとしても、精神は後世にそして永遠に光り輝くのである。

(朴桂媛 訳)

注

- (1) 既発表の二篇は、中川浩一・趙珍淑「安重根顕彰碑探索―その教材的意義を中心に」第44号、中川浩一・朴桂媛・金慶淳「柳寛順顕彰碑探索―その教材的意義を中心に」第45号である。
- (2) 金玉均の墓が、都立青山霊園の外人墓地にあることは、田中潔『青山霊園』東京公園文庫33（一九八一年）郷学舎に紹介されているが、それが墓というよりは記念碑であり、しかも撰文が独立党結成の同志であった朴泳孝の文である事実にはふれていなかった。
- (3) 霧社事件の全体像は、中川が編著者の一人として取りまとめた次の書物によって、明らかにされている。  
中川浩一・和歌森民男編著『霧社事件―台湾高砂族の蜂起』（一九八〇年）三省堂。
- (4) 岩間（中村）玲子は茨城大学教育学部社会科学学生当時、卒業論文に霧社事件の歴史を構成するサラマオ事件の究明を取りあげ、また『霧社事件―台湾高砂族の蜂起』を分担執筆した。
- (5) モーナルダオの墓については後述するが、霧社観光の眼玉的景物であり、人口に膾炙する存在となっている。
- (6) 十月二十五日は、天照大神と北白川宮能久親王を祭神とする台湾神宮の祭礼日であった。霧社事件は、その二日後に発生した。
- (7) 柳本通彦『台湾・霧社に生きる』（一九九六年）現代書館、二二三―二二四ページ。
- (8) 『霧社事件―台湾高砂族の蜂起』一三四・三五ページ。
- (9) 『台湾・霧社に生きる』一三〇ページ。
- (10) 現在は、莫那魯道と表記するが、光復からしばらくは莫那道と書かれた由である。
- (11) 『台湾・霧社に生きる』一三二ページ。
- (12) 同右二七・八ページ。
- (13) 「朝日」一九七五・十一・六
- (14) 人名が全てハンゲル表記のため、名前を漢字に変換しにくいのでやむを得ずローマ字つづりとした。この碑については『柳寛順顕彰碑探索―その教材的意義を中心に』でも言及した。碑文のほん訳は、金慶淳（現・ソウル銀行本店勤務、国立忠北大学校師範大学歴史教育学科卒業、元・茨城大学教育学部日本文化理解留学生）である。
- (15) 小林慶二『観光コースでない韓国―歩いて見る日韓・歴史の現場』（一九九四年）高文研、三六ページ。  
君島和彦・坂井俊樹・鄭在貞『旅行ガイドにないアジアを歩く―韓国』（一九九五年）梨の木舎、四七ページ。
- (16) 『旅行ガイドにないアジアを歩く―韓国』一七・八ページ。
- (17) 『柳寛順顕彰碑探索―その教材的意義を中心に』十九ページ。
- (18) 同右二二―二四ページ。
- (19) 『安重根顕彰碑探索―その教材的意義を中心に』一七―九ページ。  
『柳寛順顕彰碑探索』二五―二六ページ。
- (20) このことについては、齊藤泰彦『わが心の安重根―千葉十七 合掌の生涯』（一九九四年）五月書房に詳しい。
- (21) 沈載植『大韓義士安重根』（一九九四年）安重根義士記念館 二九―三〇ページ。

〔付記〕

灯台もと暗しのたとえの様に、茨城大学所在の県都水戸に、日朝交流の記念碑があることを、不明にも気付かなかったので、紀要執筆最後のチャンスに取りあげさせて頂く。

県都水戸で、随一の風光を誇る千波湖の北岸、桜川右岸の堤防もかねる堤



の一角に、「朝鮮民主主義人民共和国帰国記念」「一九六〇年十二月四日」の文字を右と左に配して、「朝日親善」の碑が建っている。建立者は、在日朝鮮人総連合会、分会と読めるのだが、多分風化してしまった「茨城県」の三字もあるのだろう。

碑の足下に、水戸市が取りつけた銘板があり、次の様に記される。

日朝親善記念碑由来

一九五九年（昭和三十四年）十二月、在日朝鮮人を乗せた帰国第一船が、新潟港から朝鮮民主主義人民共和国に向け出港しました。

これは、日朝両国民と関係諸団体によるたゆみない運動の成果であり翌年二月には、水戸市からも在日朝鮮人が帰国しました。

これを記念し、日朝親善の証を後世に残すため、日朝両国民と水戸における関係諸団体の協力によって、ここ千波湖畔に柳が植えられ、記念碑が建てられました。この碑石は、日立鉾山の裾を流れる宮田川の自然石です。日立鉾山には、太平洋戦争中に、多数の朝鮮人が強制連行によって就労し、苛酷な日々を送った史実がある。

本碑の存在は、影山雄之先生（元・水戸市立酒門小学校長、茨城大学教育学部非常勤講師）のご教示により「発見」した。

（\*茨城大学教育学部社会科教育講座）

（\*\*大韓民国国立忠北大学校人文大学歴史学科学  
生Ⅱ元・茨城大学教育学部短期交換留学生）

（\*\*\*大韓民国国立忠北大学校大学院修士課程学生Ⅱ  
元・茨城大学大学院教育学研究科短期交換留学生）  
（一九九六年十月十四日受理）